Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-06

「時間の社会学」のあゆみ

鳥越, 信吾

(Citation)
社会の時間 : 新たな「時間の社会学」の構築へ向けて:10-20

(Issue Date)
2022-06-30

(Resource Type)
research report

(Version)
Accepted Manuscript

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009404

第１章　「時間の社会学」のあゆみ [1)]

鳥越信吾

第１節 問題の所在

本章の課題は、時間の社会学がこれまで何をしてきたのかを――もちろん限定的な視角からではあるが――振り返ることにある。時間という主題は、社会学において十分な蓄積がない問題領域であるとされてきた。実際、社会学者が時間について言及する場合はほとんどつねに、時間がいかに社会学において等閑視されてきたかについての嘆息からはじまる［Giddens 1981; Zerubavel 1981=1984; Bergmann 1983; Adam 1990=1997; Hassard 1990; Urry 2000= 2006］。しかしながら、欧米の社会学界では時間というテーマのもとで、すでにいくつかのまとまった研究が提出されているし［Adam 1990=1997; Hassard 1990; Nowotny 1992］、周知の通り社会理論の文脈においても、時間の問題を考慮することの重要性は再三にわたって指摘されてきた［Giddens 1979=1989; Giddens 1981; Harvey 1990=1999; Urry 2000=2006］。さらに、Time and Society（1992～）という社会科学の時間論に特化した専門誌さえ存在する。「時間の社会学は今日、社会学分野において独立したディシプリンをもつ一つの類型とみられている」［Šubrt 2001: 217］というシュブルトの言は、こうした時間の社会学の現状を端的に表現しているといえる。しかしながら我が国の社会学においては、こうした欧米における時間の社会学の展開がいまだ断片的にしか知られていないように見える [2)]。以上より、時間の社会学の学説史を紹介することに本章の目的は存する。

議論の補助線として、あらかじめ２点指摘しておきたい。第一に、時間の社会学と言われた時、おそらく多くの人は、「それぞれの社会にはそれぞれの時間がある」という議論をしていると考えるという点である。たとえば直線的な近代社会の時間と、円環的な前近代社会の時間、というイメージである。本章の目的は、こうしたイメージとは異なった時間の社会学像を、その学説史をまとめることによって取り出してくることにある。

第二に、時間の社会学における研究の断片化の問題である。すでにＷ・ベルクマンやＨ・ローザが指摘しているように、時間の社会学の課題はその「独在論的 solipsistisch」な性格にある［Bergmann 1983: 462; Rosa 2005: 20］。すなわち、数多くの研究がそれぞれ独自になされている一方で、これらの研究をまとめる統一的な土台を欠いているということである。本章では、時間の社会学の学説史をまとめることをとおして、この問題の解決のためのささやかな一歩を示すことを目指す。

第２節 「絶対時間」との対決　19 世紀後半から 20 世紀初頭の隣接諸学の傾向

集中的な議論に入る前に、時間の社会学の成立の背景に触れておく必要がある。『自然哲学の数学的原理』で近代科学の基礎を築いたＩ・ニュートンの出発点には、時間が「一般的」には「主観」の作用に依存するものと考えられること、そしてそのことにより時間が「相対

的な」性格を有すると考えられることがあった。ニュートンによれば、「私は空間、時間、運動は、すべての人によく知られているものとして、かくべつ定義しない。ただ私が注意しなければならないことは、一般の人はこれらの量を、知覚できる対象との関連から引き出された観念としか考えていないことである」［Newton 1687= 1963: 199］。しかしながらそうであれば、こうした時間のもとでは、物理的対象の正確な計測を目指す自然哲学（自然科学）を打ち立てることはできない。そうであるがゆえに、ニュートンにとって自然科学の時間は、主観的作用の相関物という性質から切り離された自存的なもの、すなわち「おのずから、また自身の本質にしたがって、外部の何ものとも無関係に一様に流れていくもの」［Newton 1687=1963: 199］と規定される必要があった。要するに、「それら〔時間〕を絶対的なものと相対的なもの、真実のものと見かけのもの……に区別するのが好都合」［Newton 1687=1963: 199、括弧内は筆者］だったのである。ニュートンの「絶対時間」の概念は、こうした理論的要請にもとづいている。

> 絶対時間は、天文学においては、見かけの時間の均時差または補正により、相対時間と区別される。……すべての運動は加速や減速を行うが、真の一様な、絶対的時間の進行は、何の変化もうけない。［Newton 1687=1963: 200］

ここに、物体運動に対する主観的作用の相関物としてではなく、そうした運動とは独立した絶対的な座標軸として、時間を捉える観点が成立することになる。

この「絶対時間」の観念は、とりわけ一九世紀後半から二〇世紀にかけて、徹底的に問い直されることになる。相対性理論や量子力学がその最たる例だが、ここでは H・ベルクソン、E・フッサール、M・ハイデガーの三人の哲学者の営みを概観してみよう。彼らの時間論の共通の特徴を、過度の単純化という誹りを恐れず取り出してみれば、それは次の二点にある。第一に、計測可能で抽象的、直線的なニュートン的時間を、「空間化された時間」「客観的時間」「通俗的時間（vulgäre Zeit］」などという概念を用いて指示したうえで、これらの時間に対して、計測不可能で具体的、そして非直線的な時間である「持続」「内的時間意識」「本来的な時間性」と呼ばれる時間性を対置していること。そして第二に、三人ともが同じく、これら後者の時間性に集中的な考察を向けていること、これである［Bergson 1889=1990; Heidegger (1927) 1993=2013; Husserl (1928) 1966=1967］。

彼らのこのような営みの地平に、「絶対時間」との対決という問題設定を見てとることはたやすい。彼らの時間哲学の主たる眼目のひとつは、ニュートンが要請した計測可能で抽象的な絶対時間との対決を通して、それとは異なった時間性を提出することにあったと言える。

第 3 節　時間の社会学の成立

時間の社会学もまた、ニュートン時間以外の別の時間性の探究、という上で見た同時代の

諸学の傾向と軌を一にする仕方で、時間への探究を始めたと言ってよい［cf., Gurvitch 1964: 23］。P・ソローキンと R・K・マートンがすでに指摘しているように、時間の社会学の成立の背景として、「天文学の領域」および「ブラッドリー、バークリー、カント、そして最近では、スペンサー、ギュイヨー、ジェームズ、そしてベルクソンといった哲学者たち」の成果によって、「ニュートン時間の偶有的な性格」がすでに明らかにされていたのである［Sorokin and Merton 1937: 616］。

さまざまな論者から指摘されているように［Bergmann 1983; Pronovost 1989; Hassard 1990］、時間の社会学は E・デュルケームの『宗教生活の基本形態』［Durkheim 1912=2014］をもってその嚆矢となすことができる。周知の通り社会学の対象を、自然科学の対象とする自然的事物にも個々人の意識にも還元しえない「社会的事実」に求めたデュルケームによれば、社会学の対象としての時間もまた「社会的事実」としての性格を有する。すなわち時間とは、一方でニュートン力学が想定するような唯一の絶対時間ではなく、社会集団ごとに異なった様相において現出するいわば相対的な時間である［cf. Durkheim 1912=2014:31］。また他方で、時間とはカントの考えたような自我の意識に先験的に属するカテゴリではなく、人びとに外在的に経験される「非人格的な外枠」、すなわち「私の時間ではなく、同一の文明に属する万人によって客観的に思考されるような時間」である［Durkheim 1912=2014: 30-31］。デュルケームの重要性は、まず何よりも自然科学的な絶対時間とも異なった、しかし他方で哲学的な意識の時間とも異なった、いわば社会制度としての時間の概念を切り出したことに求められよう。その後デュルケームの考え方は、およそ一九六〇年代ごろまでのあいだに、フランスにおいて H. ユベールや M. モース、M. アルヴァックス、G. ギュルヴィッチといったデュルケームの影響下にある論者たちによって［Miller 2000: Gadéa and Lallement 2001］、またアメリカにおいて P. ソローキンと R. K. マートンや W. ムーアによって、様ざまな仕方で展開されていくことになる［Sorokin and Merton 1937; Moore 1963=1974］。

ここでは初期の時間の社会学の代表的著作であるソローキン＆マートンの論文「社会的時間：方法論的・機能的分析」をごく簡単にとりあげよう。彼らの問題意識は、上で述べたニュートン時間の偶有的な性格という基本的認識の上で、一方で哲学や心理学、経済学、そして天文学などではすでにニュートン時間にはとどまらないさまざまな時間に光が当てられていること、ただし他方で社会科学者たちはいまだに時間とは量的で連続的なもの――つまりニュートン時間――であるという前提を置いていること、にあった［Sorokin and Merton 1937: 615-8］。ここから彼らは、「単一で同質的」「純粋に量的」な天文学的時間［Sorokin and Merton 1937: 621］に対して、「質的」で「非連続的」な社会的時間の概念を設定してくる［Sorokin and Merton 1937: 623-4］。なぜ社会的時間の概念の設定が必要かというと、社会的時間の「質」は「ある集団に共通の信念および習慣から派生してくる」ものであり、「そしてこの質はさらに、それが見いだされる社会のリズム、脈動、ビートを暴き出すことに資する」からである［Sorokin and Merton 1937: 623］。すなわち、天文学的時間の概念からでは見えてこないある社会に独特のリズムや周期性を発見するための索出的なツールとして、

社会的時間の概念が必要なのである。

以上から、この時期の時間の社会学の特徴を、以下に指摘しておきたい。すなわち、この時期の時間の社会学は、量的なクロックタイムと質的な社会的時間という区別に立ったうえで、後者に主に焦点化していることである。J・ハサードによれば、この時代の時間の社会学は、「社会的時間がクロックタイムとは分析上区別されるということを強調」し、自身の分析対象を明示的に前者の「社会的時間」に措定することにその主たる特徴をもつ［Hassard 1990: 5］。その場合に「社会的時間」と対置されるクロックタイムは、「天文学的時間」ないし「物理的時間」と同様、計量可能で抽象的な性格をもつ時間と考えられている。彼らの主たる関心は、このような区別に立ったうえで、質的な「社会的時間」を社会学に固有の研究対象として捉え解明することにあったのである［Nowotny 1992: 422］。

第 4 節　時間の社会学の展開

前節では、デュルケーム以来 1960 年代ごろまでの時間の社会学が、ニュートン時間以外の別の時間性の探究という方向性をもって成立・展開してきたことをみてきた。ただし、そのさいにニュートン時間そのものは、時間の社会学において必ずしも十分には論じられてこなかった。先に述べたように、この時代の時間の社会学の多くは、「クロックタイム＝ニュートン時間」に対して社会的時間を対置するという図式に立ったうえで、後者の社会的時間を自身の分析対象だと考えていたのである。

これに対して 1970 年代以降、時間の社会学はニュートン時間そのものをその社会的構築性の観点から対象化し、それについて議論を積み重ねるようになる。この時期は、W. ベルクマンが時間の社会学という学問領域が成立したとみる時期である［Bergmann 1983: 462］。時間の社会学がどのようにクロックタイムについて議論を重ねたのかについて、以下必ずしも網羅的ではないが、いくつかのタイプを列挙してみよう［鳥越 2019］。

第一に、クロックタイムの社会的構築性に主たる関心を向ける研究が挙げられる。これは非近代社会についての時間研究などを引き合いに出しながら、クロックタイムが近代社会とともに生じてきたものであることを示そうとする研究である。たとえば真木悠介の『時間の比較社会学』［真木 (1981) 2012］や、O・ラムシュテットの研究がよく知られている。ラムシュテットは、1975 年の論文「時間に関する日常的意識」で、時間理解の歴史的な変化を記述している。彼によれば、第一に、もっとも原初的な「今」と「非今」のみをもつ時間理解が存在し、そこから第二に循環的な時間理解、第三に「閉じられた未来」を伴う直線的時間理解（目的論的な時間観）が成立し、最後に近代的な「開かれた未来」を伴う直線的時間理解（非目的論的な時間観）が生まれてくるという［Rammstedt 1975: 50］。この四つの時間理解は、社会の機能分化の程度に応じて分類されており、第一の類型が最も機能分化の程度が低い未開社会に、第四の類型が最も機能分化した近代社会に該当するとされる。また、N・エリアス『時間について』においても、クロックタイムが歴史の発展の中で社会的に生まれてきたことが明らかにされる［Elias 1988=1996］。さらに、時計の発展と時間意識の関

係についての社会史的研究もこれに含まれるだろう［Attali 1982=1986］。

第二に、クロックタイムのいわば機能分析とでも呼びうるタイプの研究が考えられる。これは、人々が世界内における自分の位置を知るためのシンボルとして時間を捉えるエリアスの仕事［Elias 1988=1988］、そして時間が権力の源泉として機能していることを明らかにした B・シュワルツ［Schwartz 1975］や、時間には——TPO という形で用いられるような——「適切な時」を指示する機能があることを詳細に論じた E・ゼルバベルの研究が挙げられる［Zerubavel 1981=1984］。いわば、クロックタイムが社会や個人にとってどのような機能をもっているかを明らかにする研究群である。

最後に第三に、クロックタイムに対する批判的研究というタイプを挙げることができる。このタイプはさらに大きく、クロックタイムが人々に対して生み出す問題に対する批判的研究と、それが研究者に対して生み出す問題に対する批判的研究に、便宜的に分けることができる。第一のタイプの代表的なものとしては、クロックタイムが人々に「時間のニヒリズム」という病理をもたらすことを看破し、それに対する批判の契機を探究した真木の仕事や［真木 (1981) 2012］、近年では、クロックタイムの加速化が人々を疎外しているという現状認識のもと、それに対して批判理論の立場からアプローチするローザの一連の仕事が挙げられる［Rosa 2005, 2013］。

第二のタイプとして考えられるのは、クロックタイムを前提にした科学的認識には問題があることを示すような研究、いわばクロックタイムの認識論的な研究である。よく知られているものとして、人間の生を捉えるためには空間化された時間ではなく持続という別の時間性についての洞察が必要であることを主張する H・ベルクソンの所説があるが、社会学では、A・シュッツやギデンズの仕事がこれに含まれると言える。

第 5 節　時間の社会学を振り返る　アダムとアーリによる「デュルケーム」にもとづいた学説史理解

以上、きわめて概略的ではあるが、時間の社会学の学説史をたどってきた。その結果明らかになったのは、初期の時間の社会学は、量的なクロックタイムと質的な社会的時間を対置する図式に立ち、後者の探究を行っていたこと、これに対して後期の時間の社会学は、量的なクロックタイムへと探究の対象を移していること、これである。

最後に検討したいのは、この初期と後期とのあいだの関係である。両者の関係については、B・アダムと J・アーリによって、次のような考え方が提示されている。アーリによれば、時間を一つの社会制度だとみなしたデュルケームの思索に端的に見て取られるように、「これまで社会科学者たちは、自然的時間と社会的時間の間には根本的な違いがあると主張してきた」［Urry 2000=2006: 209, 192］。こうした区別に立って社会的時間の研究を続けてきた結果、「社会的時間の理解においては意義深い変遷があった」［Adam 1990=1997: 244］けれども、ソローキンとマートンによって提示された「自然の時間は社会的時間とは違ってクロックタイムである、一様に流れる量として特徴づけられる時間である、という論点」［Adam

1990=1997: 244］については、まったく問い直されてはこなかった。すなわち、「このクロックタイムこそが、自然的時間の決定的な特徴として、つまり歴史を通じて社会的時間から切り離されてきた時間として、社会科学が考えてきた時間にほかならない」という事実によって、「クロックタイムは人間の創造物である」ということにながらく光が当たることはなかったというのである［Urry 2000= 2006: 209-10］。クロックタイムをその社会的構築性から問題化していく後期の時間の社会学が登場してきた背景として、このような文脈を描くことができる。したがって、アダムとアーリの理解に基づくならば、時間の社会学の初期から後期への移行は、当初は自然的時間であると考えられていたクロックタイムが、実際には近代社会の成立とともに生じてきた社会的時間であることに気づかれていく過程だということになる［鳥越 2015］。

けれども、このように時間の社会学を理解したとき、一つの問題が生じてしまう。すなわち、初期の時間の社会学以来、社会的時間の概念は質的という規定を与えられていたわけだが、クロックタイムをこの概念に含めようとすると、社会的時間に量的という規定も与えねばならなくなることである。そうすると、社会的時間の概念は、きわめて大きな概念になってしまい、本来構想されていた索出的な機能を持ち得なくなってしまうことになる。シュブルトが、近年の時間の社会学では、社会的時間の概念がうまく（索出的なツールとしては）使われていないことを指摘しているが［Šubrt 2015: 339］、この背景には、クロックタイムが社会的時間として位置づけられていく上記の事実があると解釈することができる。

第 6 節 時間の社会学を描き直す　ソローキン＆マートンをもとにした学説史理解

以上、アダムやアーリの以上のような学史理解からは、社会的時間概念のいわば機能不全という問題が帰結してくることを見てきた。以下では、このような問題の生じない、別の学史理解を簡潔に示したい。

まず、アダムとアーリの上述の議論は、社会的時間と自然的時間の区別を、それが社会的に構築されているかいないかという基準から捉えている点を指摘したい。このことは、アーリが上の引用箇所でクロックタイムを人間の創造物であるにもかかわらず自然的時間にカテゴライズされてきたと論じていることに看取できる［Urry 2000=2006: 209-10］。また、アダムに関しても、彼女の『時間と社会理論』の主題の少なくとも一つが、「自然的時間の特徴とみなされているものが、実際のところは人間的創造物にほかならない」［Adam 1990=1997: 244］ことを自然科学の時間論の検討を通じて明らかにすることにある点から、アーリと同様の見方をしているとひとまず考えることができる。すなわち、社会制度としての時間が社会的時間であり、そうでない時間が自然的時間であるという、――彼らの見るところの[3)]――デュルケーム的な把握様式から、彼らは社会的時間／自然的時間を理解していると指摘することができるのである。こうした見方は、たとえばゼルバベルが「物理的、生物的時間の秩序は自然の摂理による、必然的なものであるのに対し、社会的時間の秩序は本質的に社会が人為的につくり出した、習慣的なものにすぎない」［Zerubavel 1981=1984: 10］

と述べているように、時間の社会学の多くの論者も則っている見方である。

けれども、ソローキン＆マートンにおいては、社会的時間／自然的時間の区別に社会制度かどうかという基準は必ずしも見られない。彼らにとって、やはりこの区別は、それが質的か量的かという基準によっている。そして重要なことに、彼らは「時間システムはすべて、集団の構成要素の諸活動および諸観察を同期化し調整するための手段を提供する必要性に還元できる」［Sorokin and Merton 1937: 627］という立場から、「集団間の相互行為が拡大していくことで、諸々のローカルな時間システムに取って代わるか、あるいは少なくともそれらを補うような、ある共通の拡大した時間システムが発達してくる」［Sorokin and Merton 1937: 627］という、ギデンズの「時間と空間の分離」に類する時間理解を示した上で、「「時間のエスペラント」としての天文学的時間が、社会的に出現してくる」［Sorokin and Merton 1937: 628］ことを指摘していることである。すなわち、ソローキン＆マートンにあっては、天文学的時間は、近代化とともに生じてきた社会的に構築された時間なのである。

このように、ソローキン＆マートンの規定通りに社会的時間と自然的時間の区別を理解した場合、時間の社会学の学説史を、以下のように描き直すことができる。まず大前提として、必ずしも社会的時間のみが社会的に構築された時間だと考えられているわけではない。そのうえで、初期の時間の社会学は、質的な社会的時間／量的なクロックタイムという区別に立って、前者の研究を行っていた。その後、後期の時間の社会学は、同様の区別に立った上で、後者の研究に着手していく。すなわち、アダムおよびアーリの理解では図式の修正過程だった学説史が、本章の読み筋では統一的な図式の中で研究が展開・累積していく過程として描き直されうるのである。

本章では、ソローキン＆マートンの意味で社会的時間の概念を理解することで、時間の社会学を、その前提図式の上に累積的に発展していった過程として捉えてみたい。量的なクロックタイム／質的な社会的時間という図式に立ち、後者を研究していた初期の時間の社会学と、前者を研究する後期の時間の社会学――時間の社会学のこのような研究対象の変化は、近代社会の中には複数の時間が存在しているということを明らかにし、それらを射程に収めうる視座を徐々に確立していく過程として位置づけることができる。プロノヴォストの「社会学者たちは、一つの時間（the time）についてではなく、相互に関連し、しばしば相矛盾する複数の時間（times）について探究している」［Pronovost 1989: 2］という言は、この意味で理解されなければならない。

このような複数の時間という考え方は、ただし、「それぞれの社会にはそれぞれの時間がある」という意味での時間の複数性、つまり、社会（集団）の数だけ時間がある時間の相対論という考え方とは、区別される必要がある。社会の数だけ時間があるという考え方は、冒頭で述べたとおり、おそらく多くの人が時間の社会学と聞く時にまず思い浮かべる議論の構図であろう。もちろん、こうした構図から見出しうる社会学的な知見もあるだろうが、しかし後述する通り、こうした構図は議論の過度な単純化を招きかねない。むしろ、ローザの指摘するように、抽象的-直線的時間と出来事の時間、労働時間と余暇時間といったように、

複数の時間からアプローチすることが、後期近代の複雑な時間構造の解明のために取られうる必要な方途の一つであろう[4)]［Rosa 2005: 277］。

第７節 終わりに

本章では、時間の社会学の学説史を概観した上で、社会的時間／自然的時間の区別を社会的に構築された時間かどうかという意味で理解したとき、時間の社会学の学説史は社会的時間概念の機能不全という問題を帰結することを示した。これに対して、この区別を質／量という意味で理解したとき、時間の社会学の学説史が、社会的時間の機能不全を回避しつつ、ひとつの統一的な図式の上に諸々の時間を研究する時間の社会学が累積的に発展していく過程として描かれうることを示した。

最後に、時間の社会学をこのように理解することの可能な意義をここでは四点、挙げておきたい。第一に、時間の社会学を累積的に複数の時間についての知見が確立されていく過程として捉えたとき、このようにして形成されるいわば「複数時間論」を、本章冒頭で紹介したベルクマンやローザの独在論批判に答えるための土台として位置づけることが可能である。すなわち、これまでなされてきたさまざまな時間についての社会学的研究をその中に位置づけることのできる共通の土台を、時間の社会学の学説史から取り出すことができるのである。

第二に、本章の学史記述からは、前述したような社会的時間の概念の機能不全という問題を必ずしも帰結するわけではないことが挙げられる。この問題は、社会的時間の概念を必要以上に大きくすることによって生じるものであった。これに対して本章の見方からは、ソローキン＆マートンが彫琢したままの概念規定で、索出的機能を確保したまま社会的時間の概念を位置づけることができる。

第三に、この複数時間論は、一つの社会の中にもさまざまな時間がありうるという事実を正面から取り扱うためのきっかけとなりうる。社会学的に時間が論じられる際、しばしば「直線的な近代社会の時間」vs「円環的な前近代社会の時間」のように単純化した図式がとられるが、しかしながらこうした認識からは、諸社会ごとに複雑な形態をとっているであろう時間の複数性が、抜け落ちてしまう可能性がある。たとえば近代社会に生きる人々は、クロックタイムと暦（社会的時間）のなかでもっぱら自らの生活を組織化しつつ、そこには睡眠や食事に関わる生物学的時間や、季節の移り変わりなども関わっているに違いない。こうした事態に光を当てるために、複数時間論は意義をもつと考えられる。

最後に、複数の時間の相互関係および「ズレ」に焦点化した研究が可能になることである。すでにソローキン＆マートンにおいても、複数成立している質的なローカルな時間システムが、一つの単一な天文学的時間のシステムに代補されていくという論点が示されている［Sorokin and Merton 1937: 628］。また、A・シュッツは、人々の経験には内的時間、生物学的時間、宇宙的時間、社会的時間などの複数の時間が関わっていることを指摘したあと、そのズレから「待機」という現象が生じてくることを指摘している［Schütz und Luckmann

2003=2015］。たとえば、自分の意識の時間と生物学的時間のズレから食事を待つという事態が生じてくるのである［鳥越 2020］。あるいは他にも、このズレから、焦燥感や切迫感という感情や[5]［cf. Aho 2007］、現代社会に特徴的な現象としての加速化について［Rosa 2005］、違った角度から光を当てることが可能かもしれない。

ただし、本章にも数多くの課題がある。第一に、本章で扱ったのは、数多くある時間の社会学のごく一部であるという点が挙げられる。とりわけ、本章では、以下３つの研究領域については、ほとんど議論の俎上に上げられていないことが指摘されなければならない。第一に、G・H・ミードや A・シュッツなど、哲学的視角から時間を問題にするような議論、第二に、B. アダムのような、時間が社会理論の中でどのような位置づけにあるかを検討するような議論、第三に、時間についての経験的研究である。

また第二に、本章では、時間を社会的／自然的と区別することそのものの妥当性については、等閑に付して議論を進めた。多くの時間の社会学がこの区別に則っていることがその理由であるが、しかしこの区別そのものを問題視する、たとえばエリアスのような議論もある［Elias 1988=1996］。これらについて稿を改めて論じたい。

注

1) 本章は、鳥越信吾［2015］をもとに、それを大幅に書き換えたものである。また、JSPS 科研費 JP1902145 の助成を受けたものである。
2) もちろん日本の社会学にも時間の研究はすでにいくつも存在するし［ex., 真木 (1981) 2012; 今津 2008; 伊藤 2008; 多田 2013］、他にも多数の雑誌論文が――管見の限りでは、社会学誌上では 1993 年の『ソシオロジ』37 巻 3 号、2010 年の『社会学評論』60 巻 4 号、2011 年の『社会学年誌』52 巻において三度の時間論特集も組まれている――発表されている。いずれの研究も時間という主題を論じる上で示唆に富むものではあるが、必ずしも学説史的な関心を強くもっているものではない。
3) 本書所収の金瑛の論文は、こうしたデュルケーム理解を批判的に検討するものである［金 2020］。
4) とはいえ、最終的にはローザはこのような時間の捉え方には、後期近代にあってもやはりクロックタイムが支配的であるという理由から、異を唱えている。詳細は［Rosa 2005: 277ff.］を参照。
5) 2020 年 9 月 1 日の研究会での高橋顕也氏（立命館大学）の示唆による。記して感謝申し上げたい。

文献

今津孝次郎 [2008]『人生時間割の社会学』世界思想社.
伊藤美登里 [2008]『現代人と時間』学文社.
金瑛 [2022]「時間の「社会性」をめぐる考察――デュルケーム時間論を再考する」高橋顕

也・梅村麦生・金瑛編著『社会の時間――新たな「時間の社会学」の構築へ向けて』科研費研究成果報告書.
真木悠介 [(1981) 2012]『時間の比較社会学』,『真木悠介著作集II』岩波書店.
多田光宏 [2013]『社会的世界の時間構成』ハーベスト社.
鳥越信吾 [2015]「時間の社会学の展開――「近代的時間」観をめぐって」『人間と社会の探求』79: 83-95.
――― [2019]「近代的時間と社会学的認識」『日仏社会学年報』30: 17-34.
――― [2020]「社会学における待機の問題」, 中西眞知子・鳥越信吾編著『グローバル社会の変容』晃洋書房.

Adam, B. [1990] *Time and Social Theory*, Polity.（1997, 伊藤誓他訳『時間と社会理論』法政大学出版局）.
Aho, K. [2007] "Acceleration and Time Pathologies: The critique of psychology in Heidegger's Beitrage," *Time & Society*, 16(1): 25–42.
Attali, J. [1982] *Histoires du Temps*, Libraire Arthéme Fayard.（1986, 蔵持不三也訳『時間の歴史』原書房）.
Bergmann, W. [1983] "Das Problem der Zeit in der Soziologie: Ein Literatürüberblick zum Stand der 'zeitsoziologischen' Theorie und Forschung," *Versuch Einer Ontologie Der Persönlichkeit*. (35) 3: 462-504.
Bergson, H. [1889] *Essai sur les données immédiates de la conscience*, PUF.（1990, 平井啓之訳『時間と自由』白水社）.
Durkheim, E. [1912] *Les formes élémentaires de la vie religieuse: Le système totémique en Australie*, Alcan.（2014, 山崎亮訳『宗教生活の基本形態』岩波書店）.
Elias, N. [1988] *Über die Zeit*, Schröter, M. (Hrsg.), Suhrkamp.（1996, 井本晌二・青木誠之訳『時間について』法政大学出版局）.
Gadéa, C. and Lallement, M. [2001] "French Sociology and Time: Origin, Development, and Current Research", *Kronoscope*, 1 (1-2): 101-128.
Giddens, A. [1979] *Central Problems in Social Theory*. Univ. of California Press.（1989, 友枝敏雄・今田高俊・森重雄訳『社会理論の最前線』ハーベスト社）.
―――, [1981] "Time and Space in Social Theory," (Hrsg.) Matthes, J. *Lebenswelt und soziale Probleme: Verhandlungen des 20. Deutschen Soziologentages in Bremen 1980*, Campus Verlag.
Gurvitch, G. [1964] *The Spectrum of Social Time*, Reidel.
Harvey, D. [1990] *The Condition of Postmodernity: An Enquiry into the Origins of Cultural Change*, Cambridge MA.（1999, 吉原直樹訳『ポストモダニティの条件』青木書店）.
Hassard, J. [1990] "Introduction: The Sociological Study of Time," Hassard, J. (ed.), *The Sociology of*

Time, The Macmillan Press; 1-20.

Heidegger, M. [(1927) 1993] *Sein und Zeit*, 1.Aufl., Max Niemeyer.（2013, 熊野純彦訳『存在と時間一－四』岩波書店）.

Husserl, E. [(1928) 1966] *Vorlesungen zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins*, Heidegger, M. (Hrsg.), Max Niemeyer.（1967, 立松弘孝訳『内的時間意識の現象学』みすず書房）.

Miller, W. W. [2000] "Durkheimian Time" *Time & Society*, 9(1), 5–20.

Moore, W. [1963] *Man, Time, and Society*, John Willey & Sons.（1974, 丹下隆一訳『時間の社会学』新泉社）.

Newton, I. [1687] *Philosophiæ Naturalis Principia Mathematica*.（1963, 岡邦雄・市場泰男訳『プリンキピア——自然哲学の数学的原理』（世界大思想全集——社会・宗教・科学思想篇３２）河出書房新社）.

Nowotny, H. [1992] "Time and Social Theory: Towards a social theory of time," *Time and Society*. 1(3); 421-54.

Pronovost, G. [1989] *The Sociology of Time*, SAGE.

Rammstedt, O. [1975] "Alltagsbewußtsein von Zeit," *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 27: 47-63.

Rosa, H. [2005] *Beschleunigung: Die Veränderung der Zeitstrukturen in der Moderne*, Suhrkamp.

————, [2013] *Beschleunigung und Entfremdung: Entwurf einer kritischen Theorie spätmoderner Zeitlichkeit*, Suhrkamp.

Schütz, A. und Luckmann, T. [2003] *Strukturen der Lebenswelt*, UVK.（2015, 那須壽監訳、大黒屋貴稔、木村正人、鳥越信吾訳『生活世界の構造』ちくま書房）.

Schwartz, B. [1975] *Queuing and Waiting: Studies in the Social Organization of Access and Delay*, University of Chicago Press.

Sorokin, P. and Merton, R. K. [1937] "Social Time: A Methodological and Functional Analysis," *American Journal of Sociology*, 42(5): 615-629.

Šubrt, J. [2001] "The Problem of Time from the Perspective of the Social Sciences," *Czech Sociological Review*, 9(2): 211–24.

————, [2015] "Social Time, Fact or Fiction?" *Sociology and Anthropology*, 3(7): 335-41.

Urry, J. [2000] *Sociology Beyond Societies*, Taylor &Francis Books Ltd.（2006, 吉原直樹監訳『社会を越える社会学』法政大学出版局）.

Zerubavel, E. [1981] *Hidden Rhythms*, The Univ. of Chicago.（1984, 木田橋美和子訳『隠れたリズム——時間の社会学』サイマル出版）.

※なお、訳語は適宜変更している。